



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticano の転載許可済
— 発行所 — ©1987
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

ロザリオを 家庭の祈りに

玄義を 黙想しよう

1 アヴェ・マリアノ、これは挨拶でもあり懇願でもありません。挨拶、それは神の永遠なる御子の御誕生に当たって協力者となることを承諾したマリアを称えてのこと。懇願、それは「恩寵に満ちた」御方の取り次ぎを通して全能の神に向けられたもの。

アヴェ・マリアノ (主の祈り) と(栄光唱)の言葉と交互に唱えられるこの神秘的な呼びかけは、深い霊的交わりの一瞬を体験させてくれますが、それは、主要なマリア聖堂のいくつつかをつないだテレビのおかげでさらに一層感銘の深いものとなりました。(六月六日のロザリオの祈りのこと) いくつもの立派な教会で、

数えきれない程の聖職者や修道者の共同体で、苦しみや医療の場で、援助と慈善の場で、そして多くの家庭で、つまり五大大陸中に鳴りひびいてすばらしい心のハーモニーとなりました。男性も女性も、老いも若きも、すべての人が共に祈りの言葉に加わり、全世界のコーラスとなったわけ

2 このローマのサンタ・マリア・マジョーレ大聖堂は、ずいぶん前の前任者シクストゥス三世が(祝福された処女マリアと神の民)とに奉獻なさいましたが、このマリア年開始の前夜に、祈りと交わりと慈愛とで、まことに心打つものとなりました。神の御母、聖マリアノ、救いの歴史とマリアの現存となつながら五玄義を黙想しながらお祈りしたところです。

この黙想は、私たちの唇から出る言葉に無限の息吹を与えてくれます。

ロザリオの玄義を黙想して行く、歴史の深い意味を発見できるようにあります。しかもその歴史は、御摂理による救いの計画で染め上げられてあり、また弁護者である聖霊が数々の出来事を通して進展させるものです。聖霊は「人間の地上の道行に浸透し、神の無限の大洋の中で全創造物、全歴史がその究極の目的に向かって流れるようになさるのです」(自動トミヤム・エトウイウイ・カンテム)

この世の歴史に困難の時が訪れても、人間とその真の文明にとって有利に解決するためには、超越的なものに対して気前よく開かれた心で対応しなければならぬと確信し、そして共に祈ることによって、人間家族全体の連帯の絆を強めました。

現代人は、人生行路を辿る自らの旅の意味について、時には無意識に、時には苦しみつつ、自問します。未曾有の進歩にもかかわらず、現世の矛盾、人々の中にある矛盾、あるいは人生の真の価値を疑わせるような数々の矛盾のために、現代人は動揺しているのです。(…)

皆さんがどのような人であろうと、どのような人生を送っていようと、神は皆さんを愛しておられます。神

は皆さん方ひとりひとりを愛しておいでになるのです。人間は創造主と交わるよう招かれています。そして真理と幸福への抗し難いあこがれがあるために、私たちは絶えずこのことを思い出します。

アヴェ・マリアノ、二千年前、時が満ちて「ガラツィア4・4」という言葉が救いの歴史の新しい道を開きました。この同じ言葉を使って、私たちはマリアを通して神の元へ戻りたいとの望みを言いあらわします。マリアが私たちをキリストへと導いてくださるからです。

御託身の二千年目に入らんとする今、人間の間の真理と友情を保証するものとして、神との関係を強めたかと思えます。

マリアは(新しい人類)の模範であり手本であります。マリアは神の御計画が十二分に実現された女性です。マリアは「主の申しはしため」であり、それと全く同時に「恩寵に満ちた」御方なのです。

3 アヴェ・マリアノ、この優しい祈りが沢山の神の教会や聖堂に、喜びにあふれてひびき渡りますように。時という路を歩む巡礼の足どりに、巡礼の旅を歩く神の民の足どりに、記録されますように。ロザリオがふたたびキリスト者の家庭であるあの「家庭教会」に固有の祈りとなりますように。ロザリオの祈

り、二十世紀の勇敢だが憂いにみちた人類をお愛しになる神の柔和な口調を、処女マリアの微笑みとともに私たちの世界にもたらしてくれることでしょう。これこそ、マリア年の門出に際して心からあふれ出てくる願いです。この年が、「申しはしため」のために御目をとめ「偉大なこと」をマリアに、そしてマリアを通してなされた主に対して全教会がお捧げする、みごとな(マニフィカト)となりますように。

処女マリアのマニフィカトが私たちのマニフィカトにもなりますように。このマニフィカトが、聖霊の御力によってマリアを通して主の最愛の御子・贖い主イエズス・キリストをお与えになった神に対して、私たちの感謝のしるしとなりますように。すべての誉れと栄光はとこしえに主にありますように。アーメン。
(一九八七・六・六)

聖母と親しく 語り合おう

1 さて、もうマリア様とロザリオの信心についての私の考えや願いがおわかりですね。

神の御母であり私たちの母であるマリア様について、さらにたゆまず学んでください。また、何よりもまず、神の御旨に余すところなく御自分委ねられたマリア様を、あくこ

お喜ばせることだけを心がけてください。

お祈りが必要なのはわかりませんが、イエズス様がなさったこと、私たちがのためにお苦しみになったこと、つまり、イエズス様の子供時代の玄義、御受難と御死去の玄義、そして栄光にみちた御復活の玄義、これらを出してよく考え、お祈りしたいのです。

■へロザリオは教皇のお気に入りの祈りです。

■ロザリオを唱えながら、悲しみをマリア様におまかせし、希望をうち明け、心を開きましよう。

皆さんはロザリオの(玄義)あるいは(一連)を唱えながら、聖霊の導きに従います。すると、聖霊はみなさん方の心に語りかけて、イエズス様にもっと近づいて見習うよう、マリア様と一緒に、そしてとりわけマリア様のように祈れるよう、導いてくださることでしよう。ロザリオは、(沢山のことで心を全くふさがれている)現代の人々にとって、とても役に立つ観想的なすぐれた祈りです。ロザリオはマリア様御自身の祈りであり、マリア様を信じる人たちが

の祈りなのです。

2 ロザリオの玄義はまさしく窓にたえられましょう。この窓から(神の世界)に首を突っ込んで、夢中になって眺めることができずから。この神の世界から、ヘリストが私たちに残された模範(ペトロ①・2・21)から力を得ているのなら、困難の時には勇気を出し、逆境にあれば耐え忍び、誘惑をうけても堅固な心でいることができます。

皆さんたちはロザリオの玄義の数に合せて15人ずつのグループにわかれて、互いに祈り合います。このようにすれば、皆と一緒に贖い主の御母にロザリオ全部をお捧げできるわけですが、私の名によって二、三人の集まるところには、私もまた、そこにいる(マテオ18・20)という主の御言葉もあるように、はるかにたやすく願いを聞き入れてもらえるのです。(…)

3 ロザリオを黙想しながら、イエズス様が皆さんと一緒にいらっしゃることを確信すれば勇気が湧いてきて、マリア様のお取り次ぎによって、教会とこの世とに平和と正義をお与えくださいとお願ひしたくなるはず。毎日、信心をこめてロザリオを唱えなさい。これは主の御母の勧めです。聖母はルルドやファチマにおいてそうお勧めになった御方です。

教皇もまた、皆さんにロザリオを毎日唱えることをお勧めします。ご存じのように、ロザリオは(教皇のお気に入りの祈り)です。何にもまして、皆さんの名前のとおり、ロザリオの各玄義の中に見られるいくつ

もの徳を自分のものとするようお勧めします。お友だちと一緒にこの祈りを唱えてください。とりわけ家族で、皆さんの特徴を発揮して、一所懸命、熱心に唱えてください。

4 ロザリオは、天国の御母マリア様との心からの会話です。ロザリオを唱えながら、私たちのことを御子イエズスにとりなしてくださいと、マリア様にお願ひします。こうして私たちは、マリア様を通じて神様とお話するのです。

愛する皆さん、このようなやり方でロザリオを唱える習慣を身につけてください。きまり文句を繰り返すのではなく、生きている人がもうひとりの生きている人に向かって話すように、マリア様とお話してください。この御方はたとえ眼に見えなくとも、信仰の目で見ることでできます。事実、聖母と御子イエズスは、いずれ死すべきこの地上での生活よりもずっと(生き生きとした)生活を天国で送っていらっしゃいます。

5 ロザリオはマリア様との親しい会話です。ロザリオを唱えながら、私たちは、悲しみをマリア様におまかせし、希望を打ち明け、心を開きませし、ロザリオは、御子の御名においてマリアが私たちに求めたことをいつでも喜んでいたします、と宣言する祈りです。

これ以上ない程苦しく困難であっても、マリア様の御保護を確信してお願いすれば、マリア様はいつでも私たちが救いに必要なすべての恩寵を御子から得てくださる。こう確信して、どのような境遇にあってもマリア様に忠誠を約束する方法なのです。愛する少年少女の皆さん、聖なる処女マリアがいつもみなさんを見守ってくださいますように。皆さんが人としてキリスト信者として成長してゆく過程で、マリア様が皆さんを守ってくださいますように。さらにまた、皆さんの御両親、先生方、御親戚やお友だちを、マリア様が守ってくださいますように。(…)



説教・講話・書簡等の抄訳

イエズス・キリスト、メシアー司祭

キリストシリース ⑥

1 周知のように、「キリスト」というギリシヤ語は「メシアー」

の同義語で、「油を注がれた者」を意味します。旧約聖書が伝える伝承によれば、この「キリスト」という名は、前回のテーマであった「王」という性格とともに「司祭」という性格をも備えているということですから、メシアーの使命に属する要素として、この二つの性格は互いに異なるものでありながら、また互いに相補する関係にもあります。旧約聖書に記されているメシアーの姿は、王としての使命と司祭としての使命の深い一致を示し、両方の要素を含んでいるわけです。

2 ずっと昔に、この一致を見ることのできるものがあります。

その原型と前兆を表わしているのはアブラハムの時代の旧約聖書に描かれている神秘的な人物、すなわちサレムの王、メルキセデクです。創世の書にアブラムを出迎えるメルキセデクが登場します。「メルキセデクもパンとぶどう酒を供えた。メルキセデクはいと高き神の祭司だったからである。彼は次のように言っている。『アブラムを祝福した。』天地の創造主、いと高き神によって、アブラムは祝されよ。』(創世14・18-19)

王であり祭司であるメルキセデクの姿は、メシアーの詩篇と呼ばれる詩

篇109に記されているメシアーの伝承と重なり合っています。詩篇の中で神ヤーウエは語ります。「私の主(すなわちメシアー)に神のみことばは、『私の右に坐れ、私は敵をあなたの足台としよう。』主はあなたの力あるつえを、シオンから広められる。あなたの敵を治めよ。』(詩篇109・1-2)

ヤーウエの語りかける御者が王の特質を備えていることは疑いようもありません。そして詩篇は、「主はそう誓われた。悔いることはあるまい。『あなたは永遠の祭司、メルキセデクの位に等しく。』(詩篇109・4)

と続きます。神ヤーウエが「右に坐れ」と語りかけるのは明らかに「メルキセデクの位に等しい」王であり祭司である御者です。

礼拝と償いの犠牲

3 イスラエルの歴史において、旧約聖書が定める司祭職の制度は、モーゼの弟であるアロンにさかのぼります。そしてその司祭職はイスラエルの十二部族の一つであるレビ族に世襲されることになっていました。

この点についてシラの書に重要な記述があります。「主は、アロンを高く上げられた。それはモーゼの兄弟(…)レビ族の人だった。主はア

ロンと永遠の契約を結び、民の祭司職を与えた。シラ45・6-7)。「彼は生きる人の中から選ばれ、主にいけにえをささげ、香と記念の香炉をたき、民のために償いを行なった。主は(アロン)におきてを授け、律法の規定をまかせられたので、彼はヤコブに主の証を教え、イスラエルを主の律法で導いた。(シラ45・16-17)

祭司が選ばれるのは、礼拝のため、また賛美と償いのいけにえを捧げるためでした。ところでこの礼拝は、神とその掟を教えることにもつながっていたのです。

4 このシラの書にさらにもう一つ意味深い箇所があります。

「ダビドにも契約が結ばれ(…)子どもうちのただ一人だけが父から相続するが、アロンの相続は、子どものみが受け継ぐ。(シラ45・25)

この伝承によれば、司祭職は王の尊厳に「並んで」位置するものです。しかし、イエズスは、司祭職を世襲するレビ族からではなくユダ族から出られたため、メシアーの司祭として

の性格はイエズスに合わないように思えるかもしれません。イエズスの時代の人々は、イエズスを教師、預言者あるいはダビドの後継ぎ、彼らの「王」とみなしていました。従って、メルキセデクの伝承、つまり王であり祭司であるという伝承は、イエズスの内に見ることができなかったというわけです。

5 しかしながら、その考えは外見からのみ判断した不十分なものでした。過ぎ越し祭の出来事が「メシアー・王」そして「メルキセデクの位に等しい王・祭司」の真に意

味するところを明らかにしています。それは旧約聖書に記され、ナザレトのイエズスにおいて実現したことです。衆議所での裁判の席で、「あなたは神の子キリストなのか」と尋ねる大司祭に対し、イエズスは次のようにお答えになりました。「そのとおりである。私は言う、人の子が全能なるもの右に坐るのを……あなたたちは見るであろう」と。(マテオ26・63、64)

6 この真理を完全に言い表わしているのがヘブライ人への手紙で、レビ族が受け継ぐ司祭職とキリストの司祭職との関係を伝えています。著者はメルキセデクの司祭職に触れていますが、それは、神の御摂理によってアブラハムの時代からすでに神の民の使命のうちにきざまられていた前兆、すなわちメルキセデクの姿と関連して告げられていた予告が、イエズス・キリストのうちに実現したことを伝えるためでありました。そこではキリストについて次のように記されています。「完全なものとされて、御自分に服従するすべての人の永遠の救いのもととなられ、そして神によってメルキセデクの位に等しい大司祭と宣言された。」(ヘブライ5・9-10)

さらに、創世の書の中のメルキセデクについて語られていることを思い出させながら次のように続きます。「その名の示すとおり(メルキセデクは)まず正義の王であり、次にサレムの王すなわち平和の王である。彼には父もなく、系図もなく、日々の始まりもな

く命の終りもない。彼は神の子になぞられた永遠の司祭である」と。(ヘブライ7・2-3)

7 礼拝の儀式と契約の櫃、旧約の種々の犠牲の類比を使うヘブライ人への手紙の著者は、イエズス・キリストを「天のものの写しであり影でもある」(ヘブライ8・5)旧約のすべての表象と約束の実現として表わしています。ところで、憐れみ深く忠実な大司祭(ヘブライ2・17、3・2-5参照)キリストは、「永久にとどまり、変わることをない司祭職を保ち」(ヘブライ7・24)、「汚れのない御自分を神に捧げられ」(ヘブライ9・14)たのです。

8 深い感銘をさそうこのヘブライ人への手紙は何節か引用する価値があるでしょう。イエズス・キリストは世に入るとき御父に仰せになりました。「あなたは職も供え物も望まれます、ただ私のために体を準備された。あなたは燔祭と罪償の犠牲を喜ばれなかった。そこで私は(神よ、私は御身の御旨を行なうために来る)と言った。(ヘブライ10・5-7)「こういう大司祭こそ私たちのために必要であった。(ヘブライ7・26)「そこで、キリストは神への奉仕において憐れみ深い忠実な大司祭となり、人々の罪をつぐなうために、すべてにおいて兄弟に似た者となられるはずであった。(ヘブライ2・17)

このように、キリストは罪を除いてすべてを私たちと同様に味わわれ、私たちの弱さに同情される大司祭でした。(ヘブライ4・15参照)

9 そしてさらに続きます。「キリストは他の大司祭のように、

新刊 御案内
聖なるロザリオへ改訂新版
エスクリバー著(一三〇〇円 一三〇〇円)

不変の教え

若者たちへ

キリストに向かつて歩みなさい

日々まず自分の罪のため、次に民の罪のために贖を捧げる必要はない。なぜなら御自分を捧げ、一度で永久にそれを成し遂げられたからである。(ヘブライ7・27) 「キリストは将来の恵みの大司祭として来られたのであって……自分自身の血をもって、ただ一度だけで永久に至聖所に入り、永遠のあがないを成し遂げられた。(ヘブライ9・11-12) 「永遠の霊によって、汚れのない御自分を神に捧げられたキリストの御血が、私

永遠の司祭

ちの良心を死の業から清めて、生きる神に奉仕させる。(ヘブライ9・14) キリストは永遠の救いの御力をもった司祭です。「御自分によって神に近づく者のために取り次ぐ」として常に生き、その人々を完全に救われる(ヘブライ7・25) 御方なのです。

最後に注目すべきは、神の啓示によってメシアの伝承が含ま

キリストを隅の親石とするならば使徒たちは土台である、と聖パウロは言っています。(エフェソ2・20参照) 司教と教皇の役割は何ですか、と皆さんはお尋ねです。それは、キリストの御生涯を、完全無欠な姿で使徒の時代から後の世へと保ち伝えてゆくことです。「ゆだねられたよいものを守って」(ティモテオ②・14参照) きたのです。教区の信者たちの一致に関して、教区内の信仰の堅固さと福音宣教の推進に対して、司教には責任があります。また教区民がキリストの秘跡に与れるよう、配慮しなければなりません。皆さんのおっしゃる通り、司教は道案内をしてくれるのです。いや、道を示す以上のことも。キリストは、神の王国の発する命令を司教たちにお委ねになりましたが、それはあらずもがな勧告ではなく、火急の訴えなの

です。司教は皆さん方の真中に立つ羊飼いで、イエズスから教会に与えられた羊飼いだと言えましょう。だからこそ位階制があるのです。司教は群れの先頭に立つ羊飼いです。「進み続け」るよう、手助けしてくれるのだ、と皆さんはうまく言いあらわしました。司教なくして教会は存続し得ません。司教も存在しませんが、司祭は司教の全司祭職に与っているからです。

私はローマの司教、使徒ペトロの後継者です。主はかつてペトロにお命じになった如く、私にも群れ全体の——小羊も羊も合わせて——世話を怠らぬように、と仰せになります。兄弟たちや司教たちと共に心を合わせて、全世界の教会の一致と信仰と歩みのため力を尽くすようお求めになつています。聖ペトロは、よく鍵を手にした姿で描かれますね。その

鍵で神の御国の扉を開き、中へ入れられる、という意味です。私のためにも、お祈りください。お互いのために祈りましょう。

共に築く

が教会の一人ひとりに託されたその役割を履行しましょう。でも縄張りを作らないように。共に築き、兄弟の心を持って、互いに尊敬しつづきましよう。これから育つ若い人々と成人たちとの間に、隔てを作らないでください。あなた方にも、自分自身の場においてほしいと思えます。教会の送るメッセージに耳を傾けてください。メッセージは時に難しいこともありますが、それは複雑でニュアンスに富み、教会全員の運命を決するものだからです。他の人々にも説明してあげてください。そして何よりも、メッセージに従い、謙遜に生きるよう努めてください。

教会の生命は、組織と骨格だけでできているではありません。もう

メシアの職務はメルキセデクの姿に象徴されていることがわかります。すなわち、「メルキセデクのより他の司祭が立てば、以上述べたことがもっと明らかになる。その人が司祭と立てられたのは、肉の掟の律法によるのではなく、不朽の命の力によってである。(ヘブライ7・15) つまりそれは永遠の司祭職なのです。(ヘブライ7・3・24参照)

忠実な保護者であり解説者である教会は、エフェソの公会議(Ⅲ)やトリエント公会議(Ⅻ)、そして第二バチカン公会議(Ⅱ)によって証言されているように、キリストがメシア・司祭であるという真理を繰り返して言ひました。

この真理の証は御聖体の犠牲のうちに見ることが出来ます。すなわち、教会がメルキセデクにならない、日々捧げる聖体祭儀が、この点を明らかに証言しているのです。

と小さな単位、分け合ったり与えたりも成り立っています。皆さん方の家庭も、皆さんの活動や仲間づきあいの一つひとつも、そうした小さな単位を成しているのです。教区も必要な単位の一つです。教区があるおかげで、教会のメンバーがどんなに種々雑多な人々の集まりであろうとも、祈り、祝い、神と和解し、対立を乗り越えて共に行動することが出来るのです。すなわち、そして積極的に加わり、互いに尊敬し合ってください。皆さん方の音楽を持ってお行きなさい、ただし皆さんとは異なる兄弟姉妹たちの音色にうまく合わせるようにして。日曜日の聖体祭儀は、教区内の生命が最も高まる時です。教会の重要な集いにも参加しなくても信仰生活を営むことができる、などと考える人々の仲間入りはしないでください。

方々の共同体がいかに活動力に満ちていても、自給自足というわけにはいきません。教区も同じなのです。

皆さん方の神祕体の大きさと広がりを見せてくれるのは、普遍的な教会なのです。

皆さんの一人が、教会には未来があるかとお尋ねになりました。未来はあります。生けるキリストの上に建てられたのですから。良き未来はあるでしょうか？ それはまた、キリスト信者しだいです。

教会は時とともに変わるのでしょうか？ 信仰や道徳、秘跡の根本は変わりません。キリストの体の基本構造が変わることもあり得ません。紀元二千年になったからとて、キリスト教会が新しく生まれかわる、などということは起こりませんが、それでも、今まで出会ったことのない問題や新しいタイプの不信仰に直面すれば、その時教会は自ら刷新することが出来ますし、そうしなければならぬのです。聖霊がいついてくださるのですから、教会にはその力があります。反キリスト教化と言えども、致命的なものではありません。はやり病、受けて立つべき挑戦なのです。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説しにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393